

2025年度 群馬大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻
入学試験問題

授業実践開発コース

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は本紙を含め4枚、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

「教育評価」について書かれた次の文章を読んで後の問に答えなさい。

世界は関係のプロセス^{※1}を通して、私たちの知っている世界になる。私たちはこの関係のプロセスから、世界についての理解、意味、価値を引き出しており、それによって私たちの行為が刺激され、道徳や倫理が形成される。あらゆる知の営みが生まれ、学習が生き生きしたものになるのも、関係のプロセスを通してである。しかし、これまで見たように、ハイステークス・テスト^{※2}や成績評価^{※3}などの従来の評価方法は、学びの基盤となる関係のプロセスそのものを破壊してしまう。私たちはどんな代替案を構想すればよいのだろうか。それはどのようにして実現できるだろうか。

私たちが特に興味をもっているのは、関係のプロセスを核とし、そのプロセスから、学びを刺激し持続させるとともに関係のプロセスそのものも豊かにするような力を引き出す教育評価のあり方を明らかにすることである。このような方向性を、「関係に基づく評価」、あるいは「関係の視点から見た教育評価」と呼ぶ。私たちは意図的に、独立した客観的な判断という意味合いが強い「評価（アセスメント）」「検査」「測定」「鑑定」ではなく、「評価（エバリュエーション）」という用語を選択した。「評価」という語のラテン語の語源は、「強化する」「力を与える」という意味をもつ。評価とは、何かに価値を与え、価値づけるプロセスなのである。これにより、生徒の欠点や足りないところを指摘する従来の評価から、成長およびウェルビーイングの機会、可能性、潜在力に焦点をあてる評価への転換が可能になる。強みから出発し、その結果として希望と関与を高めることを試みるのである。同様に、関係に基づく評価は、評価が行われる文化的状況において、評価のプロセスに関わる人々——例えば、教師、生徒、保護者、管理職——の関係性に特に注意を払う。評価は、これらすべての関係に内在する資源を活用すべきである。

私たちが考える関係に基づく評価には、二つの重要な特徴がある。一つ目は、評価は「共同探究のプロセス co-inquiry process」だということである。ここでは、探究するプロセスと、共に探究することの大切さの両方が強調されている。まず、評価のプロセスには、質問し、耳を傾け、参加者の多くの生きた現実に取り組み、関心をもつことが含まれる。探究プロセスの目的は、一つの答えを見つけ出し、会話を終わらせることではない。多様な価値観と現実が絶えず揺れ動く中で、「知る」ことの最終地点は存在しない。

い。したがって、生徒の作品に評点をつけ、まとめの評価をすることはあらかじめ除外される。同時に、このような探究は、対話的かつ協同的なものでなければならない。評価は、非人間的な測定方法とは異なり、互いに感謝し合うやりとりの中で行われるべきである。ここで念頭に置いているのは、信頼、透明性、創造性を重んじる生成的な対話である。すべての関係者の意見や価値観が共有されることが理想であり、そのために、教育プロセスに関わる多様な価値観や現実を理解し、認める必要がある。こうして集合的意識、すなわち「私たちはみな一緒だ」という感覚が育まれる。私たちは共に学び、教育プロセスとその結果に対して共に責任を負っているのである。

ここで、教育者たちはすぐに、学習単元の終了時に何を学んだかを確認する、いわゆる総括的評価の限界に気づくだろう。総括的評価では、通常、何らかの基準に照らして生徒を比較し、成績をつける。関係に基づく評価が、基本的に総括的評価ではなく形成的評価になるのは、対話と資源の活用を重視するこれまでの議論から見て当然と言えるだろう。関係に基づく評価では、達成度よりも継続的な学びの充実が重視される。さらに、関係論的なアプローチは、このような形成的プロセスの理解に新たな側面を付け加える。このアプローチでは、複数の声の対話、多様な視点の共有、異なる生きた社会的現実の包摂が強調されるが、それらはすべて学びを豊かにするものである。さまざまな関係者の継続的な関係も重視されている。形成的評価の考え方はすでに教育現場に浸透しているが、評価基準が狭められ、議論の余地があまりないテストの伝統に戻したいという誘惑は尽きない。関係論的な枠組みから見れば、学びと評価は絶えず変化する、形成的なものである。

関係に基づく評価の二つ目の特徴は、価値づけに焦点をあてていることである。活動、人々、考え方、対象は、関係のプロセスの中で価値をもつようになる。個人のアイデンティティを危機に追いやる評価とは異なり、関係に基づく評価は、学習者の価値観、希望、熱意、ウェルビーイングを絶対的に肯定するものでなければならない。能力評価が学習者の関心を切り捨ててののに対し、評価は、関心の対象に息を吹き込むものでなければならない。評価は、学びのプロセスに命を与え、評価のプロセスそのものに価値を注ぎ込む。評価を、脅威や耐えるべき重荷として経験する必要はない。最終的には、成長のプロセスに必要な要素であり、豊かな未来への道を照らし出すものとして理解すべき

である。最後に、関係に基づく評価は、関係のプロセスの重要性とその大きな可能性を浮かび上がらせるものでなければならない。

※1 人々が共に参加する生成的なコミュニケーションの過程

※2 その結果が関係者の重要な利益や不利益に影響するテスト (high-stakes test)。地方自治体や政府が標準化された評価手段を使って生徒、教師、学校管理職の能力を確かめる目的で行う。例えば、イギリスでは、全国テストの得点の高い学校は賞賛される一方、成績の振るわない学校は閉校の危機にさらされている。

※3 標準化されたテストや試験に基づく成績評価。工場のモデルで捉えられる教育体制を維持する上で中心的な役割を担う。

出典:『何のためのテスト? 評価で変わる学校と学び』, Kenneth J. Gergen & Scherto R. Gill 著 東村知子・鮫島輝美訳, 2023 年, pp. 57-59. なお、出題の都合により一部を改変した。

問1 下線部「関係に基づく評価」とはどのようなものか。課題文における筆者の主張を踏まえ 300 字程度で説明しなさい。

問2 「関係に基づく評価」の考え方を踏まえて学習指導を改善する場合、どのような工夫が考えられるか。任意の教科または科目を一つ挙げて 600 字程度で具体的に論じなさい。